

地域の底力——鹿児島県肝属郡肝付町

行政の先駆的な試みが 多様な可能性を生む

きもつきちよう

鹿児島県肝付町

日常の暮らしを支えるさまざまなサポートや、
先進性の高い数多くのチャレンジを続ける
鹿児島県肝付町。
豊かな自然と未来的な発想が織りなす相乗効果が、
九州南端に位置する町を変えていく。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

肝付町南東部に位置する、JAXAのロケット発射場「内之浦宇宙空間観測所」。手前はM-V（ミューフアイブ）型ロケットの実物大模型、奥は数々の衛星を打ち上げてきたロケットの発射装置。敷地内にある「宇宙科学資料館」では、日本の宇宙事業史などが紹介されている。



「皆さんから選ばれる町になるためには、チャレンジを続けなければなりません。先発の試みには失敗のリスクもありますが、その逆境から人は成長すると思っています」と、町長の永野和行氏は語る。

充実のサポートとデジタル化が進む町

大隅半島南東部に位置する鹿児島県肝付郡肝付町は、太平洋に面した人口約一万四〇〇〇人の自治体だ。その誕生は二〇〇五年、旧高山町と旧内之浦町との合併による。通年の気候は、温暖多雨。地域の約八割を山林が占めるほか、ウミガメが産卵に訪れる海岸があるなど豊かな自然に恵まれ、第一次産業が経済の柱になっている。

九州の先端近く、のどかな景色が広がるその肝付町では現在、移住者が増加傾向にあるという。

あるという。

「二〇二三年度は

五一組二〇二名、移

住サポートセン

ター開設（二〇二

二年度）からの累

計では計八三組

計一七七名の方が

肝付町に移住され

ています」

そう話すのは、

役場職員を経て

二〇〇九年から現

職を務める町長の永野和行氏だ。二〇二三年には田舎への移住を案内する情報誌で、肝付町が住みやすい地域のランキングにおいて南九州・沖縄エリアの子育て部門第一位に輝いたという。

「移住のキーワードは、きれいな海や山。肝付町を選んでいただいた時点で、不便な環境は理解されているのでしよう。役場周辺の町なかではなく、もっぱら郊外が選ばれていますが、暮らしにくいという話は聞こえてきません」

自然環境に加えて、手厚い町のサポートが移住を後押しする。国の制度に先駆けて二〇一七年度から始まった幼稚園、保育園の無償化、一八歳までの医療費全額助成、移住者への各種補助金など、とりわけ若い世代にとっては心強い制度が整っている。

一方で高齢者に向けては、民間のタクシー事業者と連携した「AIタクシー」を二〇一九年に導入。予約の状況に応じてAIが効率的な運行経路を考える乗り合いシステムは、高齢者から塾に通うような子どもたちまで広く利用され、高齢者の免許返納率が高まる

左／一九世紀初頭に建てられた「二階堂家住宅」は江戸時代の郷士の住まいで、衆議院議員を務めた故・二階堂進氏の生家でもある。国の重要文化財指定。下／平安時代に創建された「四十九所神社」では例年十月、約九〇〇年にわたり受け継がれてきた流鏝馬が奉納される。



といった効果とともに、高齢者若く若い世代のコミュニケーションの場にもなっているという。

主産業である畜産業や農業でも、AI、ICT、IoTを組み合わせた効率的な管理方法が取り入れられているが、それら先進的な取り組みを、町内全域に設置された光ファイバーケーブルが支える。

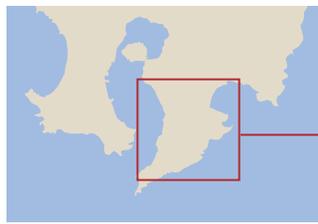
「人口に限らず、情報の過疎化も地域の衰退につながります。この町へ新幹線を誘致するのは難しいものの、情報の新幹線は引ける



との思いから、二〇〇九年の立候補の際に光ファイバーケーブルの設置を公約に掲げました」

就任後に公約を果たした当初、快適な通信環境を喜んだのは事業者や若い世代に限られたが、スマートフォンやSNSの普及により、高齢者を含めたより幅広い層がその利便性を実感するようになった。町役場においても、ペーパーレス、オンライン、クラウドの導入といったデジタル化が積極的に進められている。

町の北西部、笠之原地区に設置された、1/2.5スケールのイプシロンロケットの模型。そのほかにも肝付町役場内之浦総合支所でロケット関連の展示が見られるなど、まちを歩けば随所で宇宙を感じられる。



地域経済を循環させる スマートエネルギー

情報だけではなく、肝付町ではエネルギーに関して先駆的な取り組みを進めている。豊かな自然資源を有効活用するため、二〇一七年に町が民間企業と共同出資して設立した「おおすみ半島スマートエネルギー」だ。その名が示すとおり、大隅半島のほかの四市四町（鹿屋市、垂水市、志布志市、曾於市、錦江町、南大隅町、東串良町、大崎町）との連携を目

的としている。

電気は、大手電力会社や市場に加え、地元の水力発電所からも購入しているほか、一般家庭からの購入も推進してきたと話すのは、代表取締役の村上博紀氏だ。隣接する錦江町

への電気の販元や、リサイクル率日本一を達成した大崎町との再生可能エネルギーに関する協調など、大隅半島内の他市町との連携も実を結びつつある。

「われわれが目指すのは、電気の地産地消を通じた地域内の経済循環です。大手電力会社から電気を買えば町外にお金が流れますが、地元で売買が成立すれば地域の経済が潤う。その部分については、弊社の立ち上げ当初から地元の方々



肝付町役場本庁舎は、合併前の旧高山町役場を活用。庁舎内、1階の窓口には、発電電力をはじめ太陽光発電・蓄電システムの状況を示すモニターを設置している。

り返し説明してきました」

二〇二四年春からは電力事業を分社化。新会社では太陽光発電を要としつつ、先々は木質や食料残渣を活用したバイオマス発電、バイオガス発電も検討していると

「数ある新電力会社の中でも、人口約一万四〇〇〇人の小さな自治体が出資した当社は、まれな存在です」と話す、おおすみ半島スマートエネルギー代表取締役の村上博紀氏。左手のロゴマークは、ロケットをモチーフにした電球と、大隅半島の九市町を表した星を組み合わせたデザイン。



いう。

こうした電力事業の収益は、取引先数の広がりとともに増加しており、二〇二三年度にはその一部を寄付という形で肝付町や錦江町に還元。スポーツ団体のサポートや、地域振興関連組織への出資も行っている。

「行政の手が届かないところをわれわれが担うとの使命感の下、エネルギーだけでなく大隅半島の



上/オフィスの一角には地域住民とのコミュニケーションスペースが設けられ、顧客が持ち寄った商品も置かれている。右/地元の中学校へ本を寄贈した時の様子。収益の一部はこうした形で地元へ還元。(写真提供：おおすみ半島スマートエネルギー(株))



おすすめ半島スマートエネルギーの建物は高断熱、高気密を徹底し、屋根には太陽光パネルを設置。蓄電池と併せ、災害にも強いゼロエネルギーオフィスとなっている。



九市町をつなげる役割を意識しています。今はまだ利益の寄付に留まっているものの、今後は公共交通や教育関連など、各自治体の課題について、事業として解決していくことを目指していきます」

電力事業の分社化と同じタイミングで、あらたに農業法人も手がけるようになった。

「農業法人では肝付町南部の岸良地区周辺に育つかんきつ『辺塚だいたい』の普及や、コーヒーの栽培にチャレンジする計画があります。畑違いと思われるかもしれませんが、われわれの柱は地方創生ですから、経営の多角化については最初から想定していました」

事業の拡大とともに、雇用の場の広がりにも期待がかかる。

宇宙に近い町としてのあらたな活動と発信

肝付町南東部の内之浦地区には、日本の宇宙事業をリードしてきた施設があることにも注目したい。一九七〇年に日本初の人工衛

星「おおすみ」を、二〇〇三年には小惑星探査機「はやぶさ」を打ち上げたJAXAの内之浦宇宙空間観測所だ（一九六二年の開所時は、東京大学鹿見島宇宙空間観測所）。

「日本の宇宙開発の父」ともいわれる糸川英夫博士が、この地を選んだ際に目指したのは「地域とロケット発射場の共存」。着工時から住民と関係者の交流が重ねられ、炊き出しなどの貢献は、住民とJAXA関係者の心を一つにしたと振り返るのは、きもつき宇宙協議会代表理事の村岡知行氏だ。

ロケットの打ち上げとともに、多くの人が訪れて宿泊施設や飲食店は増え続けたが、時代の変遷とともに諸々の事情から発射回数も減少。賑わいの灯が消えてい



内之浦宇宙空間観測所近くに立つ宙の家。表にはテーブル席があり、訪れる人たちの憩いの場に。

く様に危機感を覚えた村岡氏は、二〇一二年に地域の再活性化を図るための団体として、内之浦創星会を立ち上げた。

「それまでは施設の存在やロケットの発射をビジネスの観点でとらえることはなく、その必要もありませんでした。しかしながら状況を変えなければいけないとの危機感から、世代、職種を超えた多様なメンバーが集まりました」

そう話す村岡氏もまた、実は塗



宇宙食からJAXAのグッズまで、多種多様なアイテムがそろった宙の家。内之浦宇宙空間観測所から打ち上げられたロケットをあしらった、オリジナルのアイテムも人気の。

装業を営む。その後、肝付町やJAXA、民間事業者などが手を結び、「宇宙の町 肝付町」として情報を発信する、きもつき宇宙協議会が二〇一六年に発足。二〇一九年には、訪れる見学者などの要望に応える形で、協議会が運営する宇宙関連のグッズショップ「宙の家」が誕生した。内之浦宇宙空間観測所の施設からごく近いロケーションだが、村岡氏は想定していなかった客層の変化を感じているという。

「宇宙やロケットに魅了されるのはマニアや子どもたちというイメージを持っていたものの、関連ニュースが増えた影響からか、ここ数年、若い女性の旅行者など幅広い層が宙の家を訪れるようになりました。あらたな飲食店やゲストハウスができるなど、地域も少



「合併前の旧内之浦町エリアだけではなく旧高山町エリアの子どもたちも最近、『うちの町はロケットが上がる』と自慢するようになったのが嬉しい」と話す、きもつき宇宙協議会代表理事の村岡知行氏。後ろは宙の家の敷地内、JAXAから譲り受けた直径3.6メートルのパラボラアンテナ。



県内有数の伊勢エビの水揚げ量がある内之浦漁港。停泊するのは、昌徳丸の船団。

しずつ動きだしています」

二〇一三年には種子島宇宙センターを有する鹿児島県南種子町と肝付町が友好都市提携「宇宙兄弟」を宣言し、連携したPRも行われている。現在、協議会が思い描くのは、民間企業が内之浦からロケットを発射する未来図だ。

「打ち上げ回数が増加とともに、発射日を中心とした交流人口の増加を目標にしていますが、あくまでも通過点にすぎません。先々には通年、観光客が訪れる地域にしていきたいというのがわれわれの思いです」

さまざまな課題を抱える若い漁師たちの挑戦

内之浦宇宙空間観測所に近い内之浦漁港では、三代にわたり漁業を営む「昌徳丸」のチャレンジャーが耳目を集める。これまでは父親である代表取締役の柳川哲郎氏のもと、拓哉氏、隼太氏、三帆氏の兄弟がまき網漁、定置網漁にそれぞれ従事してきた。

加えて二〇二三年夏、拓



昌徳丸の柳川拓哉氏(左)と隼太氏(右)。後継者や漁獲量が減る厳しい状況にある中、自分たちは何ができるのだろうかとの思いからプロジェクトが生まれたという。

哉氏を中心となってあらたな事業に着手した。「ロコフィッシュ」と名付けた未利用魚の直接販売を行う、「U・Locoプロジェクト」がスタートした背景を拓哉氏はこう語る。

「未利用魚とは、アジやサバのような人気の魚種とは異なり、市場に出しても値段がつかずに海に投棄される魚のことです。近年、海の資源が減る中で魚を捨ててしまいうのはもったいないとの思いがあり、おいしさが広まれば価値が上がるのではないかと考えました」

例えばシユモクザメや、アジをつぶしたような形のギンカガミといった一般には馴染みのない魚



ギンカガミやカゴカキダイなど、ロコフィッシュが並ぶ。県の林務水産課の技師だった福留慶氏がコーディネーターとしてU-Locoプロジェクトに加入し、情報発信や広報物の制作などのサポート役を務める。

(提供：(有)昌徳丸)

を、ロコフィッシュとしてネットショップで料理店や消費者に販売。朝に揚がったばかりの新鮮な状態で発送する。隣接する鹿屋市の鮮魚店の協力を得て、一夜干しなどの加工品も扱う。

発信はSNSが中心だが全国各地から注文が入り、リピーターも増えてきた。とは次男の隼太氏だ。「今は採算面よりも未利用魚の普及を重視していますし、ロコフィッシュの販売



昌徳丸では現在、インドネシアから来日した10名の実習生が、まき網漁、定置網漁の船に乗る。実習期間は3年だが、その後に特定技能実習生として残るケースも少なくない。後輩の指導者としても頼りにされている。

はU・Locoプロジェクトの一部でしかありません。漁場づくりのために磯の海藻を増やす藻場造成や、網のリサイクルを進めるなど、さらなる展開も考えています」

自社で加工場を持ちたいという将来的なビジョンもあり、ロコフィッシュの販売はその第一歩だという拓哉氏が続ける。

「最終的にはU・Locoプロジェクトを通して広く漁業に関心を増やしてもらい、後継者と働く場を持ってもらい、後継者と働く場を増やしていくことを大きな目標としています。実際、自分たちの活動を知り、他地域から定置網の漁師としてうちに就職する人も出



ふるさと納税の返礼品にもなっている、「ででこしょう」(右)とハバネロを使用する液体調味料「ででスコ」(左)。例年、辺塚だいたい収穫時の秋に手作業で仕込みを行う。(写真提供:上 泰寿)



肝付町岸良地区周辺や隣接する南大隅町に昔から自生していた辺塚だいたい、地域固有の香酸柑橘として2017年に地理的表示(GI)保護制度に登録された。(写真提供:上 泰寿)

てきました。周辺の大学や地元
の中学校でお話しする機会もあり、
その結果、インターンシップ制度
で働きに来た生徒さんもあります。
今後もそういう流れが広がって
いくことが、U・L・COPプロジェクト
の目指すところなんです」
二〇二三年秋には、肝付町の依
頼を受けて地元の祭りや振る舞
つたシユモクザメの唐揚げが人気を
博した。町のふるさと納税にもロ
コフィッシュが選ばれ、プロジェ
クトは少しずつ花開きつつある。

手つかずの環境が 移住者夫妻の開拓意欲を かきたてる

肝付町の南端に広がる岸良地区
では、前述した辺塚だいたいを活
用して移住者夫妻があらたな特産
品を生み出した。「岸良リトリ
ト」の坂田蔵人氏とみのり氏が手
がけた「ででこしょう」だ。
「でで」とは、だいたいの方言。
農業や化学肥料を使わずに育てた
辺塚だいたいと青唐辛子、海水を
炊いた塩を材料とする柚子胡椒代
わりの自家製品が周囲の好評を得
て、二〇一七年に商品化された。

岸良リトリートの坂田蔵人氏・みのり氏夫妻。購入時、1300坪の土地は建物を含めて木々に埋もれた状況だったが、夫妻が「開拓」と呼ぶ尽力が重ねられ、海を見渡せる美しい場所へと生まれ変わった。



坂田夫妻はもともと、北海道出
身。ともに海外での生活を経て蔵
人氏は英語教師を、みのり氏は看
護師として働いた後、二〇一五年
に神奈川県から移住。現在は町営
住宅で、二人の子どもと暮らす。

活動の拠点となる建物は、
二〇一七年に購入した空き家。岸
良には不動産業を営む事業者がな
く、家主や地域との信頼関係を築
きつつ交渉を重ねたという。その
後は自分たちでリノベーションを
進めて山水を引き、電気はソー
ラーパネル、暖は薪ストーブとた
き火に頼る。そんな移住生活に
至った契機を、蔵人氏が語る。
「東日本大震災後、これからの生

き方を考え始め
たのがきっかけ
でした。町なか
での消費者では
なく、自らの力
で何かを作り出
す生活をした
い時代のつもり
を奏したという。

興味深いのは、
岸良を選んだ理由だ。肝付町では
移住のサポート体制が整っていな
い時代だったが、まずはそれが功
を奏したという。

制限されるように感じました。少
数派かもしれないですが、そう
いう考えの人はいると思います」
みのり氏も、当時は振り返る。
「神奈川にいたころ、地元のカ
フェでとてもいい香りのする
んきつを知り、それが辺塚だ
いでした。さらには縁あって岸良
に来たとき、美しい自然とも
手つかずの海と山に囲まれたこ
所に魅了されました。移住者
のコミュニティやしゃれた店が
既にできていたほかの地域とは異
なり、ここでどんなことができるの
だろう、どんな出会いがあるの
だろうとわくわくしましたね」

「用意された仕事や住居が移住
の決め手にな
るケースは
多いもの
の、自分
ちにとつ
ては逆で、
先ずは暮
らしが



岸良リトリートの建物は、来客のもてなしの際などにカフェとして活用されることも。廃材を利用した器や調度品、空間まで、すべてが坂田夫妻による手づくり。



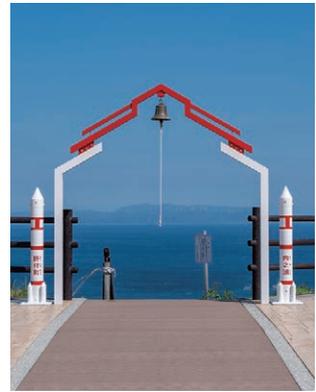
上／太平洋に面した、岸良地区へと続く国道四四八号線。「今なお、出先から車で戻ってくると、ああ、きれいだなあ」と感動します」と坂田夫妻は語る。下／初夏にはウミガメの産卵地となる岸良海岸。



内之浦宇宙空間観測所が立つのは、太平洋を望む山腹。ロケット打ち上げ時の見学場は敷地から少々離れた場所にあるが、地響きを感じるダイナミックな体験ができる。

の敷地にはかんきつ類からトロピカルフルーツまで多様な果樹が植えられ、ほかの土地でも夫妻は米

内之浦地区、標高約一八七メートルの叶岳山頂には、第一二代景行天皇が能襲討伐を祈願したと伝えられる叶嶽神社があり、中腹の「叶えの鐘」など周辺の散策も楽しめる。



や野菜の栽培を行っているという。無農薬、無肥料の手法や自給自足に近い暮らしに興味を持った、地域住民が訪れることもあるそうだ。

地元の高校で英語教師としても働く蔵人氏は海水を使った塩づくりの事業化を進めており、やりたいうことが多すぎるといふ夫妻は「可能性は無限大」と、そろって笑顔を見せた。

住民の幸せな生活を思い 行政のチャレンジは続く

肝付町でお話を伺った方々に共通するのは、現状に立ち止まることなく、歩み続けていることだった。町長の永野氏のビジョンもま

た、さらなる先を見据えている。

「まちづくりは人づくり。職員には情報戦略が大切だと常々話していますし、担当以外のテーマであっても講演会や勉強会に参加するよう勧めています。すぐに結果が出なくてもいい。五年後、一〇年後に変化は出てきます。変わっていかねければ時代に取り残されるし、誰からも選ばれなくなる」

永野氏自身は週末を利用し、町民の集まりに積極的に出向く。日常の会話の延長なら話しやすく、公式の場では耳にできないような不安や不満、小さな声も拾えるとの考えゆえだ。

二〇二三年度には「宇宙のまちづくり推進課」を設置。民間企業による内之浦からのロケット打ち上げ誘致を積極的に推し進めている。子どもたちにはJAXAの職員の協力を得て宇宙学習の場が設けられ、それもまた次なる時代の扉を開く鍵になるかもしれない。

ふるさと納税の窓口から特産品開発、観光まで広く担う、地域商社設立の準備も始まっている。

「住民の皆さんが夢と希望を持ち、安心して暮らせる仕組みをつ

くすることで田舎が変わるのではないかと、長年にわたり思ってきた。光ファイバーケーブルの設置やスマートエネルギー事業同様、地域商社の設立も新たな事業や雇用の場を広げる土台づくりの一環です。こうしたインフラが整えば、あとは住民の皆さんがそれぞれの知恵を出して活用してくださると思います」

先駆的な行政の取り組みが、豊かな暮らしを広げていく。宇宙がより身近な存在になるであろう未来に、肝付町はどのような進化を遂げているのだろうか。



岸良地区の海岸線には、目の前に太平洋が広がる憩いの場が複数設けられている。